

〈狐の子別れ〉 文芸の系譜

渡 辺 守 邦

要 旨　むかし、祖母の語った安倍の童子の咄は、歳月のペールに隔てられて、記憶もおぼろげである。それゆえであるうか、かすかな太棒の三昧の音を伴って甦ってくる。

この一話の世上への伝搬に『蘆屋道満大内鑑』のはたした功績の大きかったことは疑いないが、それだけではなかった。江戸時代を通じて、演劇とは双子の関係にあった小説の分野にあって取り上げられ、数々の作品の刊行をみている。また、明治の御代にいたるまで盛んに行われた、仏教講釈の演目の内にも含まれていた、という。曆数書の注釈に発した清明伝承が、さまざまなジャンルに文芸化されたありさまと、作品相互の間の関りについて調べてみることは、われわれの持つ清明像の依ってきたる所以を明らかにすることにもなるはずである。

一 子別れ劇への道程

『簗篋抄』に載せる清明の一代記は、『簗篋』の伝本に二系列あるうちの、第Ⅰ類本冒頭に添えられた八清明序Ⅴを原型に、龍門文庫蔵『簗篋袖裡伝』またそれに類する『簗篋』の注釈書に、例話として用いられた各種の説話を追加することによって成ったもの、とすることができ⁽¹⁾る。すなわち、漢文表記である八清明序Ⅴを書き下すとともに、清明に関する各種の異伝を増補編修して、現在みる形になったものであろう。新しい添加は、カラスの会話を聞いて帝の御悩を療治し博士の位を得ること、母を信田の杜の狐とするなど、巷間に伝わるところを取込んだものが多いようである。

かくしてここに曆道伝来にかかわる清明一代記の誕生を見ることがとなった。文殊菩薩から伯道への直伝、異国の亡鬼と化した安倍中丸に助力を仰いだ、吉備大臣による英知を傾けての請来、宿敵薩摩の道満との天文博士の位を賭した対決、妖妃玉藻の前退治、妻梨花の裏切りと伯道上人来朝しての復讐等々――そこには「金鳥玉兔集」なる秘巻をめぐっての、大小さまざまなドラマがあり、清明の半生ともつれあって、一つの物語が成り立つ。

天文博士兼縫殿頭安倍晴明こと、生国を常州は筑波嶺のふもと猫嶋に発する、安倍の童子清明の立身出世物語は、波乱に富んで充分に魅力的であるが、後にこの一話が不朽の名を残すことに寄与したのは、実は、母を泉州信田大明神化現の狐とする挿話であった。だが『簗篋抄』にあつて信田狐の扱いは、とくに目立つものではない。海道漂泊の遊び君が猫嶋にたどり着き、ある人のもとに三年滞留した間に一子を生み、一首の和歌を詠じて、忽然と姿を消す、残された孩児すなわち清明は、和歌の教えるままに信田の杜を尋ね、「古老経タル狐」に出会う、とするのみ。『簗篋抄』の場合、狐であることの意味は、母が「化来ノ人」であり、清明また「権化再来ノ人」であることを言っている

にすぎず、子別れ、母別れを嘆く文言の一片をも見出さない。

もし、この場面が民間伝承の摂取利用であったとしたなら、狐である母親の突然の失踪には、母子の別れとともに、夫婦の別れがモチーフとして存在し、その悲しみが盛られてあったはず、と想像してみることは、あながち的はずれとも言えない。『簠簠抄』に見るごとき叙述を、淡泊に過ぎるとして、文飾を加えることによって、清明の一代記に彩りを添える魅力に抗しえなかった者が出現したのも、そのように考えるとき、けだし当然とすべきかもしれない。

つまり八狐の子別れV劇発生萌芽であるが、『簠簠抄』に潤色を加え、母と子の別れ、夫と妻の別れをもって詠歎を強調する試みは、しかし、演劇の分野において初めて行われたのではなかった。『簠簠抄』が古活字版、続いて整版によって広まった寛永年間（一六二四～四四）を隔たること遠からざる寛文年間（一六六一～七三）に、この試みは行われている。仮名草子『安倍晴明物語』（寛文二年刊）がその初めであった。

『安倍晴明物語』全七巻は、後半の四巻が天文、日取など暦道の諸象の解説に終始しているが、前半の三巻には、『金鳥玉兎集』三国伝来の経過と、この暦道の秘巻を入手して宿敵蘆屋道満を倒し、天文博士に就任するまでの清明の半生がある。そこには、伯道上人渡天して親しく文殊菩薩から暦数の秘法を受けることに始まり、阿部仲麿、吉備大臣の入唐、さらには、龍宮に得た秘法による安倍の童子の栄達、禁中の白洲に行われる智恵論（行力競べ）、妻梨花の裏切り等々が備わること、また、ここにその一々を掲げることは省略するが、それ等の各話柄が細部にわたる辞句の一致を伴うこと、等によって、『簠簠抄』との関連を言うことができる。

ただし、清明の半生記は、『簠簠抄』をそのまま置き換えたという態のものではない。たとえば、『簠簠抄』にあつてルーズなままに放置されている、物語進行の時間の扱いに、秩序を与えるための努力が払われている。『簠簠抄』

では、阿部仲麿が入唐して梁の武帝の接見を受けたり（史実は唐の玄宗皇帝）、一条天皇御宇（九八六）の人情明が、鳥羽帝（一一〇七）の寵妃玉藻の前追放に関与することを始めとして、時代設定が支離滅裂のまま物語は進行する。それを『安倍晴明物語』では、仲丸入唐を霊龜二（七一一）年八月二十三日、吉備大臣入唐を翌三年八月で玄宗皇帝開元五年、清明 of 叙位を天徳四（九六〇）年九月二十四日の内裏焼亡事件に当て、さらに道満に殺されるのを太平興国元（九七六）年十一月とするなど、うるさいまでに年時を明記し、可能なかぎり史実に拘泥するとともに、清明に超人的な長寿を付与せねばならない玉藻の前退治一件を削除するなど、物語の進展に、時間の流れに従った整理を施している。その結果、清明の半生は、『簠簋抄』から大きく逸脱しないままに、そしてもちろん平安朝の官人としての実伝とは無縁のままにはあるが、実在感を帯びるに至っている。

年時の整合が実在感を増すことに寄与したとするならば、そのような清明像が親近感を増すことに与って力あったのは、子別れの場面の改編である。

『簠簋抄』の母子の別れが、およそ素っ気ないものであることは、すでに言った。父親も、猫嶋の「或ル人」とされるのみでそれ以上の記述はなく、存在の影が薄い。それに対し『安倍晴明物語』では、まず父親に安倍の保名という固有名詞を与え、人皇六十二代村上天皇の御宇の、信田の杜近き阿部野の住人、とする。保名のもとに飄然と美女が尋ね来たって夫婦となり、童子を生んで後、一首の歌を残して姿を消すことは『簠簋抄』に変らないが、美女つまり童子の母の失踪をはさんで、その前に一家の団欒を、その後、残された父子の悲嘆を、新たに描き加えている。子宝と田の稔りに恵まれての平安と、母を失い妻に去られた父子の狂乱との、その間の落差が、悲嘆を強調する。

『安倍晴明物語』におけるこの場面の構成が、あらかじめ一編のクライマックスたるべく予定されていたものかどうかは、疑わしい。他の場面、たとえば、吉備大臣が唐帝から日本の智恵を試される野馬台の考試のくだりに、『簠

『竊抄』に載せない野馬台詩の全文とその注解を添え、さらに長谷観音の縁起譚にまで筆を及ぼさずにいられたかった、仮名草子作者の読者サービスともいふべき贅言、と評するのが、むしろ的を射ているであろう。だが、子別れの場面で、父親の人物像を前面に押し出し、明確にしたことの意義は、等閑視さるべきでない。幼な児の思いを代弁しての保名のクドキゴトは、また妻に対する思いの告白でもあり、この二つの思いが重層して愁歎を盛り上げる効果が期待され、ドラマ化へのお膳立てが用意された。そして、『安倍晴明物語』にみる子別れ劇への志向をまともに受けとめたのが、古浄瑠璃『しのだ妻』であった。

話を『しのだ妻』に進めるに当って、あらかじめ断っておかなければならないことがある。いま『竊抄』から『安倍晴明物語』へという影響関係を前提に、論をさらに『しのだ妻』に及ぼそうとしているが、これは必ずしも一般に認められた順序ではない。従来大方の認めるところは、古浄瑠璃『しのだ妻』には、先行作として説経『信田妻』があり、それは『竊抄』に載せる清明一代記と同巢に出づる、とするものであった。しかし、説経『信田妻』↓古浄瑠璃『しのだ妻』という説は、検討を要する。説経『信田妻』には正本が現存しない。正本が存在しないだけではない。上演を確認することもできない。説経の演目のうちに『信田妻』が存在したこと自体疑問なのであるが、正本が確認できないまま、仮に古浄瑠璃『しのだ妻』の本文を説経『信田妻』に置き換えることによって成り立っていた説なのである。

説経『信田妻』を仮想してみるのが、いつだれによって始ったものか、もはや確かめてみることもできないが、かかる安易な説が罷り通ってきた理由を付度してみるに、△子別れV劇の発展を演劇の世界内のみで追求しようとした結果であった、と思われる。そこで、説経『信田妻』の幻影を払拭し、演劇という枠を思い切って取り払い、他の分野に視野を拡げるとき、仮名草子『安倍晴明物語』に出会い、曆数書と古浄瑠璃の間を仮名草子が結ぶとい

う、一つの系譜を見つけ出すことになる。演劇界内部の影響関係という近視眼的視座を廃し、もっと単純に、版を重ねてポピュラーであった『簾篋抄』に直接依って『安倍晴明物語』が成ったと同じく、公刊されて手近なものになっていた書物からの影響を、考えてみようというわけである。

古浄瑠璃『しのだ妻』の初演は不明。伊藤出羽掾とされる正本と山本角太夫正本との二種がある。出羽掾正本は、正しくは『しのだづまつりぎつね並ニあべノ清明出生』と題し、延宝二（一六七四）年の刊。角太夫正本は、延宝六年刊であって、出羽掾正本の踏襲、という。延宝二年ならば、『安倍晴明物語』（寛文二年刊）とも年次的に辻褃が合いそうである。

また、『安倍晴明物語』から古浄瑠璃『しのだ妻』へという関係は、本文の対照によっても明らか。いま、試みに『簾篋抄』を加えて、三者の関連箇所を一例だけ並置してみる。この、ほんのちょっとした比較によっても、そのことは充分に納得がいくはずである。

童子出世の糸口となる「聴き耳」の一節。童子は龍宮に得た耳薬（古浄瑠璃『しのだ妻』では、母狐から授かった霊玉）の力で鳥語を聞き分ける。次に掲げるのは、カラスの語る天皇不豫の原因である。

去年御寝殿作給、其丑寅ノ柱ノ下ニ、生タル蛙ト蛇ヲ築籠。蛇者蛙ヲ可_レ飲トス。蛙者飲_レジト戦、其炎ヲ上テ
天皇御悩御座ト云也……
〔簾篋抄〕

去年内裏御造営ありしが。夜の御殿の、丑寅の柱のしたに。蛇と蛙と、生きながら築こめられ。蛇は蛙を。のまんとし。蛙は蛇にのまれじと、相たゝかふ、そのいかれるところ、天にのぼり。つるに、みかどの御悩となれり

……

『安倍晴明物語』

内裏御造営、ありしとき、夜の御殿の、丑寅、柱、礎の下に、蛇と、蛙、生きながら、築こめられ、蛇は、蛙を呑まんとし、蛙は、蛇に吞まれじと、相戦う、その憤り、天に上り、ついに、御門の御悩となる……

『しのだ妻』

三者ほぼ同文、同内容であって、関連を認めるべきことに異論はなからう。ただし、相互の関係については、いささかの説明を必要とする。天皇不豫の原因を御寝殿（夜の御殿）の礎石の下に生き埋めにしてしまった蛇と蛙にあるとする点、三者相違がないものの、『安倍晴明物語』と『しのだ妻』とが、それを内裏造営の時のこととする。このことについて、『安倍晴明物語』に、

こゝに、村上天皇、天徳四年庚申九月廿四日、後涼殿より火出て、内裏のこりなく焼にけり。その次の年、めでたく、つくり立てられて。猶、そのかみに、こえたり。

とも言う（天徳の内裏炎上は、正しくは九月二十三日。ただし、たとえば慶長十四年刊の『和漢合運』に二十四日としている）。『簞篋抄』にはこれに類する記事はなく、したがって、内裏炎上に「御寝殿」造営を関らせていない。

これは、『安倍晴明物語』と『しのだ妻』とが、両者それぞれに『簞篋抄』に依ったのではなく、相互の間で、どちらかがどちらかを下敷きに文をなした、という関係にあることを示す。そして、『安倍晴明物語』が『簞篋抄』冒頭の「金烏玉兔集」請来譚のほぼ全体を採っているのに対し、これは次にも述べることはあるが、『しのだ妻』が

請來譚の過半を切り捨てている事実をもってするとき、『しのだ妻』から『安倍晴明物語』へという影響関係は成り立ちえず、三者の関係は、『簠簋抄』↓『安倍晴明物語』↓『しのだ妻』の図式を描くもの、との結論に到達する。

ここで、かかる片言隻句に拘泥したゆえんを釈明しておかなければならない。「内裏造営」云々の辞句がここに挿入されていることには、理由がある。実は、挿話ごと年時を与えて歴史的時間の流れに関連づけようとした、『安倍晴明物語』の、例の年次整合作業の然らしめたところであった。ここからも、「聴き耳」の一話を天徳の内裏造営にからませる『しのだ妻』は『安倍晴明物語』の追従作、と言うことができる。なお晴明の実伝に即して贅言するならば、この時彼は天文得業生の地位にあって、火災で失われた宝剣再造の勘文を奉⁽²⁾っている。現実には、すでに天文博士へのエスカレーターの上にあった。

二 へ母別れVからへ子別れVへ

『簠簋抄』の清明一代記には、三国にわたり時代を超越する物語の展開があった。『安倍晴明物語』に至って、荒唐無稽にわたる点に修正が加えられたりはするものの、基本的には『簠簋抄』の枠を離れない。しかし、古浄瑠璃『しのだ妻』にあっては、やや趣きを異にする。

『しのだ妻』は五段仕立ての体裁をとるが、その梗概は次のごとくである。

〔第一段〕 人皇六十二代村上天皇の御宇、河内の守護石川悪右衛門つね平は、妻の病いを癒すため、兄蘆屋道満法師の占いに従い、狐の生肝を求めて信田の杜に狩を催す。折から信田の宮参詣の、摂津安部の郡司保明の子、安部権太左衛門保名は、勢子に追われる女狐を匿って悪右衛門と争いになり、縄目の恥辱を受けるが、狐の化け

た高僧に助けられる。

〔第二段〕 保名は谷川に溺れかかった美女を助け、夫婦の契りを結ぶ。帰宅の遅れた保名を案じた保明は、悪右衛門を襲撃して討死。保明の郎党三谷前司は、悪右衛門を保名の隠れ家に追いつめて切る。

〔第三段〕 保名は旧里へ帰るを得ず、信田の里に逼塞。その間に童子誕生して七歳のある日、蘭菊に我を忘れた母親は、狐の正体を現わし、一首の和歌を障子に残して姿を消す。古巣への道すがら、狐わなに心を狂わせるが、狛師をたぶらかして危機を脱する。跡を慕った保名父子の悲痛な呼びかけに、狐は母親の姿で出現、龍宮の秘符と霊玉を童子に与える〔4〕。

〔第四段〕 大唐の伯道上人示現して「金烏玉兔」の書を授ける。童子霊玉を耳に当てて鳥語を解し、天皇の不豫を知って上京、病因を除いて叙位、清明の名乗りを賜わる。ついで、蘆屋道満の挑戦を受け、内裏の南殿に行力競べを行って勝つ〔3〕。

〔第五段〕 道満は保名を一条戻り橋に惨殺。清明修する生活続命の法に、トビ、カラス四肢を運び来たって、保名蘇生。清明、頸かけ論を仕かけて道満を滅ぼし、天文博士に還任する〔7〕。

梗概に、『蘆簾抄』の該当箇所を、私に付した説話番号によって、添えてみた。△角つき括弧△内の数字がそれである。第五段生活続命法の場合は、『蘆簾抄』では、修法者が伯道上人、殺されるのは清明であって、相違するが、その変形と認めて、同話とした。

子別れに当てた第三段を中心として、前、後半の二部に分れる。前半は摂津安部の郡司安部権太左衛門保名と河内の守護石川悪右衛門つね平との角逐という形で劇が進行する。この対立は、保名の子清明と悪右衛門兄蘆屋道満の、

天文博士の職を賭けたライバル同士の争いとして、後半に持ち込まれる。つまり『しのだ妻』は、△保名物語▽と△清明物語▽とも称すべき二部に分かれるが、安部・石川家の抗争ということで一貫する（この構造は、郡司と守護職の対立、という読みをも可能にする⁽³⁾）。

『しのだ妻』における清明伝承の利用は、当然のこととして、後半の△清明物語▽に集中するが、『簠簋抄』あるいは『安倍晴明物語』に忠実に従うものでないことも、また当然とすべきかもしれない。『安倍晴明物語』にみられる、清明の生涯にわたる全ての逸話を網羅しようとする態度は見られない。演劇的效果を十全に発揮するであろう挿話が選ばれ、各段の所要所にちりばめられている。

ここに、『しのだ妻』が先行作『安倍晴明物語』の、何を摂取利用し、何を利用しなかったか、つまり、清明伝承がいかに改変されたかということを、とくに△子別れ▽の場を採り上げて、いささか詳しく見てみることにしたい。

まず第一に言うべきは、子別れに一段全てが当てられたこと、である。『安倍晴明物語』において、『簠簋抄』に欠けていた母子離別、家族離散の悲哀を強調する志向の存したことは、すでに見た。が、分量的に、また構成の簡繁という点において『しのだ妻』の比ではない。悲しい別れはあるものの、その悲しみの依ってきたところが明瞭でなく、迫力を欠くものに終わっていた。

改変の第二は、童子の母の人物設定であろう。後に演劇の世界にあつて△葛の葉▽の名で呼ばれるこの女性の登場に、周到的な準備を用意している。『簠簋抄』においても『安倍晴明物語』においても、この女性の登場は唐突で、子別れの場面に突如として現われる。一方『しのだ妻』では、一段目から姿を見せている。生肝を求める悪右衛門に追われる狐の姿で、あるいは段ギリで保名を救う藤井寺の「らいばん和尚」に化けて現われ、二段目では美女になり、わざと谷川に溺れかかって保名の心を射とめるなど、出番は少なくない。また三段目で獵師とからむ場面など、子別

れの哀調にそぐわないくらいはあるものの、外題に謳うごとく△釣り狐▽の妙技を見せる見せ場であり、小袖姿から野干への早替りを伴って、舞台上は文字どおりの独擅場だったことであろう。つまり『しのだ妻』の清明母は、前半の△保名物語▽における主要登場人物で、何かと目立つ役柄であった。

改変の第三は、子別れの構造とも称すべきもの。『簾簾抄』でも『安倍晴明物語』でも、清明の母は別れの歌を記すべく、突然障子に向かう。別れの日唐突に来るのであって、そのような事態に立ち至った経過や動機、つまり、母は△なぜ▽子のもとを去るのか、が明らかでない。『しのだ妻』ではどうであろうか。そのあたりを確かめてみるために、しばらく三段目の筋をたどってみることにしよう。

三段目は、保名の隠れ家のさまから語り出される。

父保明の仇石川悪右衛門を討ちはたすことはできたものの、世の噂を避けて、泉州信田の杜近くに仮の住まいを定めたまま、いつしか歳月が流れている。ある日のこと、保名が耕作の営みに野に出たあと、女房は機織りに励むが、手を休めて、ふと眺めやった垣根の菊に心乱され、いつしか狐身を現じている（このあたり『謡抄』の「忠度」に「狐ハ蔵^{ニル}蘭菊ノ叢^ニ、白楽天ガ詩也。狐ハ妖怪ナル獣也。蘭菊ノクサムラニカクレテスム也」と注することによって明らかなく、白楽天「凶宅詩」を下敷きにした、いささか心にくい趣向）。その姿を昼寝から覚めた童子に見とめられる。

『簾簾抄』や『安倍晴明物語』が三歳とする童子の年齢を、七歳に改めているのにも意味がある。物ごころついた童子、という設定である。

杜へなぜ帰らねばならなかったかのへなせの説明が、『しのだ妻』に至ってはじめて備った。正体を見顯わされたこと、さらに言えば、彼女が狐だったことに悲劇があった、とする。先に改変の第二としたところは、この点につながる。『しのだ妻』の前半を、彼女を中心に、破局に至るコンテキストに沿って述べてみれば、次のようになろう。すなわち、狩人に追われた狐が命を助けられ、報恩のため女人に姿を変えて嫁入りし、子までもうけながら、タブーの侵犯によって、人界を去る——と。

これを『安倍晴明物語』の母親像に比較するとき、違いの甚だしきに驚く。『安倍晴明物語』の母親は風のごとくに現われ、ある日呪文めいた和歌を障子に書きつけるや、瓢然として去る。保名の得る豊饒も子宝も、与えられるものであり、帰来を求めて保名父子の発する絶叫も、一方通行の空しい訴えでしかない。母狐は、保名や童子をも含め人間との関わりを最小限にとどめて神秘的ですらあり、狐身は神獣あるいは神そのものの厳かさを漂わせる。それゆえ、我を忘れるがごとき失敗を犯すことはない。

それに対して『しのだ妻』の狐の、なんと人間的なことか。報恩を思うこと然り、タブーに触れることまた然り。就中、正体を童子に見つけられて以後の行文に、真骨頂を現わす。そのあたりを、また詳しくたどってみる。

目覚めた童子は母の顔を見て怖がり、近寄ろうとしない。乳母につれられて子が奥に去ると、母は我が身の不運を嘆き、涙にurenながら人間界を去る決意を固め、再び童子を抱きとって、最後の添乳をする。子が寝入ったときに、そのまま立ち去ろうとしてためらい、書置をしたためて童子の腰紐に結いつけ、寝顔に向かって母子の縁の切れたことをくどきつつ、一首の和歌を残して、涙とともに家を出る。

ここには、子に別れる母の悲嘆がある。それを改変の第四と呼ぶことにしたい。

子別れの間を独立させて十分なスペースを確保し（改変一）、童子の母の登場に必然性を与え（改変二）、しかる後、なぜ別れなければならなかったかのへなげに納得のいく理由を与えた（改変三）。この三つの改変の積み重ねの結果として、いま改変の第四と呼ぶことにした、新しい要素が盛り上げられた、とすることができよう。

『安倍晴明物語』にあったのは、子が母に別れる悲しみであり、捨てるがごとく子のもとを去る母は、何らの感慨も表わしたりはしない。が、それも故あることであつた。『安倍晴明物語』に述べられるのは清明の一代記であつて、童子は別れの苦難を試練に代え、暦数の道に邁進して、栄達を手に入れる。母は童子に霊力とともに苦難を与える脇役にすぎない。清明の一代記に徹しようとするならば、母の活躍する場は限られ、その悲嘆の入り込む余地はなかった。

このように考えるとき、むしろ『しのだ妻』の方に問題があつたことになる。改変の結果、『しのだ妻』三段目の△子別れ△は、『簾篋抄』以来の清明一代記から大きく逸脱した。

しかし、何と輝かしい逸脱であつたことか。そこには、子の涙や夫の狼狽とともに、母の苦渋がある。蘭菊に我を忘れるあさはかさや、杜の掟てに従いながら幼な兒に心の残る未練を、畜生のゆえ、として済ますことはできない。彼女が舞台の上でくりかえす、狐と女人の早替りにいみじくも表われているのだが、異類たると人間たるとを縋みまぜて、母のあさはかさ、愚かさとして捉えらるべきであらう。

『簾篋抄』の狐は信田明神そのものであり、『安倍晴明物語』でも神獸としての靈性を多分に残していた。それらに對して『しのだ妻』では、「はづかしながら、みづからは、しのだの、もりに住、野千也」と、なお信田の杜に言及するものの、もはや神明と結びつくことなく、一介の野千として扱われる。童子の母である狐は、神明の次元を離れ

て非情さを失い、過ちを犯し、犯した過ちに泣く凡愚の地平に生きる。神位から現し身へ降下し、女人の苦しみと悲しみを知ったところに、新しい八子別れⅤが成立した。子が母に別れる試練としての別れから、母が子に生き別れる、嘆きの別れへの転換である。

ところで、報恩のために嫁入りをし、子までもうけながら、タブーを犯したために人界を去る——というのは、昔話「狐女房」の話型の構造でもある。そこから、「しのだ妻」の八子別れⅤは昔話八狐女房Ⅴを利用したもの、との考えが出てくるかもしれない。が、『簠簋抄』↓『安倍晴明物語』↓『古浄瑠璃』↓『しのだ妻』の系譜を認めるとき、この説にわかに左袒することはできない。清明の母を狐とするのは、すでに『簠簋抄』に現われる。しかし再三にわたって述べたごとく、狐は信田明神そのものであって、人界に交わって嫁入りするものの、それをもって八狐女房Ⅴと呼ぶのは、拡大解釈に過ぎる。昔話八狐女房Ⅴを、まさに古浄瑠璃『しのだ妻』がそうであるように、禁忌の犯しがキーポイントで救命や報恩の付随するものと、と厳密に定義するとき、『簠簋抄』はそのいずれをも欠いている。『安倍晴明物語』に至ってもそのままであるが、神性を薄め、子の悲嘆を盛り、父親を活躍させる。父はいたいけな子の代弁者であるとともに、夫の情を交えて、帰来を訴える。かくのごとき、狐の靈性を薄めて、世話の趣きを増す傾向の延長線上に古浄瑠璃『しのだ妻』を置くと、蘭菊に陶醉するというタブー破りは、むしろ世話味を増すため新しく設けた趣向だったのではないか。このように考えてくると、『しのだ妻』の八子別れⅤは八狐女房Ⅴの話型の転用などではなく、八狐女房Ⅴ譚こそ古浄瑠璃『しのだ妻』を原型に誕生し、広まったもの、とすべきではなからうか。

また、『しのだ妻』前半の八保名物語Ⅴに付随してすでに存在していた伝承の利用、とする考えも排除されるべきであらう。『しのだ妻』が八保名物語Ⅴと八清明物語Ⅴとの二つからなり、八清明物語Ⅴが『簠簋抄』以来の伝承に基づくとことから、八保名物語Ⅴにも基づくところを求め、能の伝書『猿轡』にいう『やすだ物語』を当てようとする

説がある。

『やすだ物語』は『猿轡』に名が記されるのみで、実体は皆目分らない。われわれは清明伝承を考えるにあたって、説経『信田妻』なる作品を捏造する過ちをすでに犯している。ここで妄想をたくましくするの愚を再び犯すべきではあるまい。清明の父を安倍保名とするのは、『安倍晴明物語』を先蹤とする。そして『安倍晴明物語』の保名は、『しのだ妻』の△保名物語Ⅴの片鱗だに伺わせるものでない。『やすだ物語』と△保名物語Ⅴの関連は、訓みの類似から言われるもの。しかして△保名物語Ⅴとは、説明の都合上、後人の勝手に作った呼称であったことを忘れてはならないであろう。

△保名物語Ⅴの創作を含め、△子別れⅤ劇の進展に古浄瑠璃『しのだ妻』のはたした功績は、賞揚されてしかるべきである。

『しのだ妻』に拘泥して、思わずも長くなった。この後の展開については、口早に済ますことにしよう。

清明にまつわるこの一話は、この後、歌舞伎や浄瑠璃の取り入れるところとなる。元禄十二年秋、京都早雲長太夫芝居上演の歌舞伎『しのだづま』において、童子の母にはじめて△葛の葉Ⅴの名がつき、以後この一類は、△葛の葉Ⅴあるいは△信田妻物Ⅴと呼ばれる。改作、類作が続いて盛行、竹田出雲の名作『蘆屋道満大内鑑』に到る。その間の経過は、浄瑠璃については、黒木勘三氏『葛の葉』戯曲の系譜的研究(『近世演劇研究』昭4 六合館)、若月保治氏『古浄瑠璃の研究 二』(昭19 桜井書店)に、歌舞伎については、守随憲治氏『しのだづま』考——狂言本と六段本と——(『近世戯曲研究』昭7 中興館)に備わるので、詳しいことをそれらに譲りたい。

ただ、△葛の葉物Ⅴの本筋から外れるところから、それら先学の論考に漏れた一作について、ここに触れておくことにしたい。それは近松門左衛門作『弘徽殿鶉羽産家』(正徳四年大坂竹本座初演)のことであって、花山院の二人の

後の争いに、清明と道満とが敵味方になって活躍する。この作品への清明、道満の関りは、『古事談』『東斎隨筆』等に載つて有名な法性寺造営にまつわる説話によるのであらう。したがって、清明の出自がとくに問題にされることもない。本作が八葛の葉物Vの系譜の中において問題になるのは、草双紙に至つて清明一代記に緋いまぜされるところにおいて、である。従つてこの作品に関しては、八信田妻物Vの戯作を論ずるに當つて、再び触れることにしたい。

三 ロマンへの回帰

『簾幕抄』に発した清明一代記は、演劇の世界に入つて、葛の葉という人物を造形した。彼女が次第に世話女房化して行くに従つて抒情味を増し、芝居小屋に集つてくる人々、また瞽女唄に耳傾ける人々の紅涙をさそつた。が、清明一代記は、ほかにも系譜があり、それに依つても庶民に身近なものとなつたのであつた。それとは、仏法勸化のための夜咄であり、そこに材を得た小説である。

勸化もの清明一代記の系譜のうちにあつて、前を承けて後続の諸作の出現を促した、いわば遊水池とも言うべき位置に、読本『絵本輪廻物語』（文政二年刊）がある。勸化ものについての説明を、まずこの作品の梗概を紹介することから始めてみることにしよう。

〔1〕 人王四十四代元正天皇の御代、靈龜の奇瑞あつて、曆道請来のため安部仲丸を唐土に派遣。玄宗皇帝（マメ）安録山に命じて、凌雲閣に幽閉。仲丸亡鬼と化す。留守を見計つた義兄好根の横恋慕に仲丸の妻自害。続いて養老の奇瑞あり、吉備大臣遣唐使を拜命。仲丸の一子満月丸同道を嘆願するも許されず。唐帝、大臣に野馬台詩の解読を課し、さらに名人玄東を相手に囲碁を打たせ、命を奪わんと謀る。その前夜仲丸亡鬼は大臣を負い行き、玄東の秘術を覗き見させる。帝前での対決に玄東劣勢、その妻隆昌女、ひそかに大臣の勝石を呑み込む。安録山華陀

の鏡を持出して詮議。大臣、石の映るを胎児と判定して命を救う。大臣の帰国に際して、安録山妨げをなす。隆昌女命を投げ打って阻み、亡魂と化し大臣の船を追って日本に渡る。

〔2〕 人王六十一代朱雀天皇のころ、摂津阿倍野の農夫実仲丸の一人子満月丸の後胤安部保名、信田大明神に祈って霊夢を蒙り、吉備大臣の末孫加茂保憲に入門、天文暦数の学を究め、奥義にあわせて愛娘の葛子を与えられる。お礼参りの信田大明神の杜頭に、桜木の宮の臣下橘元方に追われる白狐を助ける。元方は奸臣、美女をすすめて宮の歎心を得るため、葛子の入内を計り、承諾せぬ保憲父娘を相模に配流。その後葛子一人保名を尋ね来り、日を過すうちに男子を生む。五年ののち、保憲父娘許されて上洛、童子の母実白狐に身を宿した隆昌女、二人葛の葉に困惑、一首の和歌を障子に残して信田の杜に去る。童子十歳の夏、住吉の浜に亀の命を救って龍宮に至り、耳葉龍仙丸を入手する。応和元年後涼殿振動する。童子鳥語によってその原因を知り上洛、内裏の白洲に蘆屋道満と行力比べを行なって勝ち、後涼殿の異変を鎮める。その功績に渡唐、城荆山の白道上人に仕えて修行、帰朝の後、奸臣橘元方と組んだ道満の謀計により一条戻橋に殺される。変事を悟って白道上人来朝、生活続命の法を修するにより清明蘇生、道満を滅ぼす。

思わずも梗概が長くなってしまった。まとめかたの拙さによること勿論ながら、同時に内容の錯綜していることも理由の一斑である。『絵本輪廻物語』におけるこの混乱は、実は紛本のしからしむるところでもあった。横山邦治氏によれば、この読本は、『安部仲麿入唐記』『泉州信田白狐伝』（ともに宝暦七年刊）の二作に基づいている。

『安部仲麿入唐記』『泉州信田白狐伝』は、両作とも武州川崎の僧道誉なる者の著すところの仏法勸化の書。それぞれ標題にうたうごときの内容を持つが、随所で物語を中断し、「評云」と始めて、教義に即した解釈や説明を挿入する。脇道にそれるその種の言説を捨て、いささかの改編を加えるとき、そのまま『絵本輪廻物語』の文章となる。⁽⁴⁾

れゆえ、両書の梗概は改めて摘記するまでもない。『絵本輪廻物語』の梗概として右に掲げたところのうち、〔1〕が『安部仲麿入唐記』の、〔2〕が『泉州信田白狐伝』のそれ、なのである。

ストーリーは『安部仲麿入唐記』『泉州信田白狐伝』の順に進展するが、両書序文の年記が、前者の宝暦十年、後者の宝暦七年と逆で、一連の作とすることを躊躇させる。しかし『割印帳』を閲するとき、ともに宝暦七年の出願とあり、同時期の著述であったことが確認できる。⁽⁶⁾加えて、『安部仲麿入唐記』の登場人物が『泉州信田白狐伝』に「実は」の方法、すなわち生れ替りあるいは後胤として活躍し、両者因果応報の關係に仕立てられるところからしても、姉妹編と考えるべきであろう。

両者一連の作とみなすとき、仲丸の入唐に始り、清明の栄達に終る構想の基づくところ、つまり物語の典拠は、おのずと明らかであろう。横山氏は『安部仲麿入唐記』『泉州信田白狐伝』の典拠を、延享二年八月刊の『安倍晴明物語一代記』とされた。氏の引用された目録（目次）を一瞥するだけでも横山説の首肯するべきは明らか。しかし、一つだけ付け加えておきたい。横山氏の御覧になった『安倍清明物語一代記』は、刊記に「延享弍乙丑歳八月吉日／京都／書林／岡宇兵衛求版」とあったはず。これは、あの寛文二年刊の仮名草子『安倍晴明物語』の改題求版本なのである。

『安部仲麿入唐記』『泉州信田白狐伝』は、『絵本輪廻物語』がストーリーを採ることに忠実であったほどには、典拠に即していない。たとえば、葛の葉が保名のもとに来て一子を生む、『泉州信田白狐伝』での眼目ともいえるべき部分を『安倍晴明物語』に依っていない。桜木の宮に仕える橘元方と参議小野好古の、奸佞、忠義対称的な二人を配して道満対保名清明の対立をからませるのは、浄瑠璃や歌舞伎に入ってから趣向であり、とくに『蘆屋道満大内鑑』の構想に従っているものようである。ただ、葛の葉の素性を、唐土の碁打ち玄東の妻隆昌女とし、吉備大臣の

仁心に感じて亡魂と化して日本に飛来したとする箇所に至って、また『蘆屋道満大内鑑』からも離れている。

吉備大臣を相手に碁の勝負を行う者のことは、『安倍晴明物語』にも出てくる。唐帝から対局を命ぜられた憲当がその人。また、短いながらも、「宿所に帰り、明日のために、夫婦これをうつなり」と、妻への言及もある。たったこれだけの記事をもとに敷衍発展させたのが、玄東の妻隆昌女である。唐土随一の名人である夫に向って、囲碁の何たるかを滔々と語る博識を備え、殿上での対決の場に給仕の役で入り込み、勝負を伺う夫想いでもある。玄東に利なきを悟って、碁石を呑み込む以下は、梗概に述べたところなので繰りかえさないが、かかる人物を新たに造形し、さらに転生させることにより、信田狐の子別れ譚に結びつけている。

同様に、安倍仲丸の一子満月丸も、『安部仲麿入唐記』に初めて現れる虚構である。仲丸に好根なる兄があったが、奔放無頼の咎により廃嫡され、家督は仲丸の嗣ぐところとなっている。仲丸妻の美貌に迷った好根は、渡唐の留守を幸いと、満月丸を人質に、不義を迫る。進退に窮した女は自害し、満月丸は姿を隠して、安倍家は断絶する。好根、満月丸の人物造形は、お家騒動の定石を踏まえたものようであるが、いかなる先行作があるのか、具体的には定かでない。

かくして『絵本輪廻物語』は典拠を求めて影響関係を遡源するとき、『安倍晴明物語』にたどりついて、一つの系譜が浮かびあがる。同じく『安倍晴明物語』から発し、『しのだ妻』を経由して浄瑠璃歌舞伎の世界に入り、改作を重ね『蘆屋道満大内鑑』に収斂して花開いた八信田妻物Ⅴと雁行して、安倍の童子の物語に、もう一つの系譜が浮かび上がった。この時代の散文の常として演劇からの影響を蒙り、両者まったく無関係に発展を遂げたわけではなかったが、それぞれに個性を失うことをしなかった。

おそらく作劇法からくる理由に従ったゆえであろう、古浄瑠璃『しのだ妻』が、『安倍晴明物語』の前半、金鳥玉

兎の書を手する以前の吉備大臣入唐譚を切捨て、むしろハ子別れVの段に主眼をおき、以後の浄瑠璃歌舞伎の諸作またそれに倣った。これに対し『絵本輪廻物語』に至る系譜では、吉備大臣にかかわる伝奇的なスペクタクルを温存し、あえて物語を構成する二本柱の一として、たとえば『蘆屋道満大内鑑』が伝奇的な要素を残しながらも、恋人陣の前の死による保名の狂乱、親殺しを悔悟しての道満の改心、ハ子別れVの葛の葉の愁嘆等々の設定により、抒情性を盛り上げ哀感に訴えようとするハ信田妻物Vに反発するがごとく、『簾簾抄』以来のスケールの大きなロマンに固執した。

再び『絵本輪廻物語』にもどって、勧化ものの清明一代記のその後の流れを追ってみると、意外な展開に驚くことになる。連夜説教という教宣活動がそれ。

「連夜説教」という名のシリーズ出版物を紹介し、その実体を明らかにされたのは、関山和夫氏であった。⁽⁶⁾名古屋の其中堂書店が明治二十七年から三十年代にかけ毎月一冊ずつ刊行した『中将姫』『石童丸』など二十四編からなる説教本。その中に『安倍保名』の書名を見出す。

いま、その目次を記してみれば、次のごとくである。

第一席 元正天皇御治世并に靈龜奇瑞の事……………一頁

付 ○恋しくはの歌 ○易道 ○念仏の安心 ○神儒仏の区別 ○龜 ○遣唐使任命

第二席 安部仲磨入唐并に凌雲閣上酒宴の事……………十五丁^(ママ)

付 ○風渡の津 ○入唐 ○玄宗皇帝 ○楊貴妃 ○仲磨横死 ○天の原の和歌

第三席 養老の滝の由来并に安部好根奸悪の事……………廿六頁

付 ○孝子小三治 ○水、酒となる ○不孝者の話 ○貞女節に死す ○盛者必衰

第四席 吉備氏入唐并に仲曆夢に霊を顯す事……………三十八頁

付 満月丸の哀訴○血文○囲碁○亡霊○往時を語る○隆昌女の遠慮

第五席 囲碁の勝負并に吉備公仁心の事……………五十五丁

付 華清宮○二重の石○一石を吞む○華陀の鏡○吉備公隆昌女を助く

第六席 野馬台の詩并に安録山^(マヤ)奸計の事……………六十九頁

付 千八人の女○霊応○難詩○日本の未来記○恩に報ゆ○帰朝の船出

第七席 安部保名の来歴并に白狐前生物語の事……………八十三頁

付 希世○信太明神の霊告○加茂保憲○神秘相伝○夫婦の盃○白狐

第八席 保名義父に對面す並に子別れの和歌の事……………九十七頁

付 再会○葛の葉○二人の女房○曲文字○狐火○龍宮城○新浦島○京上り

第九席 童子道満大内にて術競へ並に清明入唐の事……………百十一頁

付 帝の御悩○芦屋道満○鳥語○法道仙人○十五の嵐○北野天満宮

第十席 橘元明奸計並に安部家繁昌の事……………百廿三頁

付 八十三ヶの秘伝○難行苦行○城刑山○一条戻り橋○道満後悔○安部芦屋両家の繁昌

この目次と、先に紹介した『絵本輪廻物語』の梗概とを比較するとき、両者の一致はおのずと明らかであろう。実は、

……されはとて外に演義体の物としては「安部仲曆入唐記、泉州信田白狐伝、安部晴明伝、絵本輪廻物語」又院本にて「芦屋道満大内鑑」等のみなれは今は「輪廻物語」に依りて御嘶しする事にいたしますから……

と断るところからも明らかなように、『絵本輪廻物語』の焼き直しであり、十席に分けて口演する点（より正しくは、口演の台本を装った読み物）に新しみを盛った。

だが、席を分つての連夜口演は、この其中堂の刊行物に限ったスタイルではなかった。清明の一代記で、同じく連夜説教の形式を採るものが、別に存在する。東北大学附属図書館蔵の『金鳥玉兎集将来伝記』（藤原文庫 三八四〇／一）がそれで、七十二丁の写本。奥書、識語に類するものを欠き、成立年時は不明。筆跡も、近世末から明治初期という程度にしか時代的特徴を明らかにし得ない。

『金鳥玉兎集将来伝記』が、連夜説教『安部保名』の紛本とした『絵本輪廻物語』の、もう一代前を利用していることは、前半、後半に分けたうち、保名、葛の葉、清明らが活躍する後半を、『絵本輪廻物語』にない「白狐伝ニ云ク」の語をもって始めることによって明らかなである。「白狐伝」とは、『泉州信田白狐伝』を指している。

このこと、すなわち、ともに連夜説教のスタイルを採り、内容をほぼ同じくしながらも典拠を異にして、互いに関連を認められない——は、むしろ、ことほどさように清明一代記の諸作が世間一般に広まっていたことの現れ、と受取るべきであろう。すでに紹介した連夜説教『安部保名』の「……されはとて外に演義体の物としては」云々の引用も、つまりは同じことを言っていたのである。

当時の人々に、なにゆえにこの種の清明一代記が馴染みであったのか。その根源を『安部仲麿入唐記』『泉州信田白狐伝』の両作、および作者の沙門誓誓なる者に求めることができる。両作に、武陽影向山の道阿なる沙門が序を与えているが、その中に作者のことを「或唱導者」あるいは「武州川崎隠」と呼び、勧化唱導のための著述であり、説教者の講演に百効あることを言う。つまり『金鳥玉兎集将来伝記』は連夜説教『安倍保名』に同じく、説教者の口演を助くべく著わされた書物であった。序者の道阿は署名に添えて二顆の落款印を捺すが、その一は「感蓮社」と読め

る。蓮社号を称するところからして、浄土宗である。とすると、武州川崎の沙門誓誓の著作は、浄土宗の節談説教と無縁ではない。

節談説教は、靈驗譚や高僧の一代記を口調子もなめらかに語るもので、別名節付説教とも呼ばれた。その演目は教義教説に限ることなく、およそ仏教に関わりある限り、広くを取り上げ、聴衆の耳を喜ばせることに腐心したこと、真宗と浄土宗でとくに盛んであったことなど、関山和夫氏『説教の歴史』（昭58 岩波書店）に詳しい。三都に限ることなく、全国津々浦々に至るまで盛んであって、しかも講釈師に劣らぬ人気を博した、ともいう。吉備大臣の奇想天外の活躍と安倍の童子の波乱に富んだ半生の記は、歌舞伎、浄瑠璃による流布とともに、夜の更けるのも忘れて聞き入った老若男女の耳を通じて、明治の御代に伝わった。

また草双紙化され、さらに歌舞伎化もされて人々に親しまれた。合巻『阿部仲丸唐土話』（花笠文京作 歌川芳虎画 嘉永五年刊）がその例であろう。初編しか管見に入らなかったが、「金烏玉兔集」請来の命を受けて阿部仲丸入唐、十年を経て音信のないままに、吉備大臣が新たに遣唐使となって渡海の準備を始めるところで終わっている。その間仲丸の留守を伺っての、兄「よしもと」の、満月丸を人質にとつての横恋慕があり、また巻頭の繡像に安録山、玄東の妻隆昌女などを描くところからして、未見の二編に至るまで、『安部仲麿入唐記』あるいは『絵本輪回物語』にはほぼ沿った内容であったと思われる。

そして『阿部仲丸唐土話』は、同年正月江戸中村座初演の瀬川如皐作『金烏玉兔倭入船』を当て込んだ作であった。ただしこの歌舞伎は『続歌舞伎年代記』に伝えるところによれば、筋が複雑で分かりにくく、不入りであった、という。あるいは『阿部仲丸唐土話』の第二編は、歌舞伎の不評の巻き添えをくって、未刊のままに終わったのかもしれない。

四 安倍屋清兵衛の世界

ここで、『しのだ妻』や『蘆屋道満大内鑑』に材を仰いだ草双紙についても触れておくことにしよう。が、この分野の研究は今後が期待されるところであって、多くを語ることができない。ここでは目に触れたいくつかを紹介することによって、その一斑をかいなでてみることにする。

まず始めに、黒本『(安部の保名物語)』(二冊 鳥居清信画 刊年不明 大東急記念文庫蔵)をとり上げる。題名は後補題簽による。柱刻は「安上(下)」。『あべのやすな』は信田大明神に参詣して、「あくへもん」の勢子に追われる狐を助ける。帰路、谷川のほとりに美女「くづのは」の命を助け、伴い帰って夫婦となり、一子をもうけて平和の続いたある日、「くづのは」は庭の菊に見とれて、狐の正体を現わし、一首の和歌を残して信田の杜へと帰って行く。跡を追って信田の杜に至った父子の前に姿を現わした母親は、童子に靈玉と一卷の書を与える。童子は家学の修得に励み、カラスの鳴き声から天皇御悩を知り上京、内裏の智慧競べに「どうまん」を破って博士の司の倫旨を得る、という物語。以上の梗概に明らかになように、古浄瑠璃『しのだ妻』にはほそそのまま従う。保名が捉えられ命を失わんとするとき、悪右衛門の檀那寺の住職に化けた狐が現われて命を救うこと、あるいは家学に精励する童子のもとに文殊菩薩が化現して秘伝を授けること、なども備わる。ただし、『しのだ妻』全五段を十一場面に収めることに無理がある。悪右衛門と道満の関係の説明が漏れるなどの不備もある。刊年不明ながら『蘆屋道満大内鑑』以降の作であることは疑いなく、古浄瑠璃に依っていることが珍しい。絵入浄瑠璃本にでも基づいたのであろうか。

同じく芝居に基づくものに黒本『艶男信田神力』(二冊 富川房信作 明和六年刊)、同『清明二本菊』(三冊 作者未詳 安永二年刊)、同『れんたい』(三冊か 作者、刊年等未詳)、黄表紙『安部晴明一代記』(五冊 作者未詳

寛政四年刊) などある。『艶男信田神力』は、「そのべの丞安はる」が信田稻荷に参詣して見染めた「うらはのまえ」との仲を藤川武太夫が邪魔するが、謀りごとをことごとく狐に妨げられ、また傾城「くつの葉」との間を割こうとして失敗するという物語。恋人二人の登場は八ふたり葛の葉Vの作り替えであろう。また、奴の「与丹平」が顔を出すところからしても、『蘆屋道満大内鑑』に依るもの、とすることが出来る。「そのべの丞安はる」の名は、信田社頭の花見における見染めの趣向ともども「新うすゆき」に依ったものか。本作には清明の登場はない。

『れんたい』は作品名を明らかにしない。都立中央図書館加賀文庫に零本を所蔵するのみ。別に同文庫所蔵の零葉集『玉屑集』に数葉を収めるが、これをもってしても完本とはならない。同文庫の目録に『安部清明一代記』の名で登載するが、それはペン書きの添え紙に従ったもの。いま柱題をもって仮題とした。『蘆屋道満大内鑑』を基に、他の芝居を綯いまぜることで、他の二作と共通する。すなわち『清明二本菊』に帝を滅ぼし弘徽殿を奪って天下を己がままにせんとする「平の正すみ」が、同じく『安部清明一代記』に京極御息所に横恋慕する「堀川頭みち」が登場して道満を味方に引き入れるが、それは『花山院后諍』(井上播磨少掾正本 寛文十三年刊)、『弘徽殿鵜羽産家』(近松門左衛門作 正徳四年)に演劇化されて以後、浄瑠璃や歌舞伎に盛んに取りあげられた、藤壺、弘徽殿両女御の后争いの利用であろう。もっとも『れんたい』は、行力競べの場の挿絵中、清明と対決する道満の傍らに「秋道」なる人物を描くだけであるが、彼が『古事談』『宇治拾遺物語』『東斎随筆』等に伝える、道摩法師をして御堂関白道長を呪詛せしめた堀川左府顕光であることは、疑いない。

『花山院后諍』や『弘徽殿宇羽産家』に登場する清明は、『大鏡』『宇治拾遺物語』等の彼であって、王朝の陰陽師としての行実や伝説を伴うものの、信田の杜の狐の子としての要素は持ち合せていない。清明ならぬ清明としての登場である。浄瑠璃歌舞伎の藤壺、弘徽殿の後争いに、王朝の陰陽師ならぬ狐の子清明が登場する始めは、土佐節の浄

瑠璃『源氏花鳥大全』（宝永五年刊）あたりであろうか。冒頭に「荆山」と題する段があって、清明が伯道より「ほきの真伝」を授かったことを言う。彼は、この一卷と家に伝わる「金鳥玉兔集」とを駆使して活躍する。

狐の子清明の伝承を花山院の両后の争い譚に結びつける趣向は、間もなく歌舞伎にも持ち込まれたもののようである。享保十年ごろ、『日本霊場順礼の始り』という外題の歌舞伎が、京早雲芝居の舞台に上せられている。この狂言は台帳も伝わらず、評判記にも言及がなく、上演年時を明らかにしないが、浮世草子『安倍晴明白狐玉』（享保十一年刊）が、よくその内容を伝えている。⁽⁷⁾

『安倍晴明白狐玉』は、九条傾城町の遊女乙鶴に通いつめる、源頼光の家来渡辺綱の登場によって始まる。綱は平正盛に身請けされるはずの乙鶴を強引に奪う。実は二人は、関白頼忠の命により、帝の悲しみを慰めるべく、亡くなった弘徽殿に面影の通う女性を捜していたのであった。乙鶴入内して旭の前と呼ばれる。旭の前の兄石川悪右衛門、北面の武士に取り立てられる。悪右衛門の弟道満、蘆屋から上洛して、清明と「寄徳くらべ」を行う。

以上が前半であるが、弘徽殿と乙鶴は対立する関係にないものの、平正盛と頼光の臣四天王とが後の位をめぐって争う設定を『花山院后評』の変形と考えることは出来るであろう。そこに道満や清明がからむ。二人の行力競べのあることが八信田妻物Ⅴに連なることを示すが、物語が後半に及ぶに至って、この事実はさらに明瞭になる。

後半は吉備大臣の嫡孫、真備中納言家のお家騒動の形をとる。奥州に客死した当主真備保正の跡を、後妻蘭菊の生んだ保丸が継ぐが、保正の義母妙玄尼は自分の弟平正盛の子に継がせたく、家臣衣笠民之進との不義を言い立て、保丸母子を追出す。その後しかじかの事があり、蘭菊の犠牲によってお家安堵に至るのであるが、終末にいたって、蘭菊が、実は葛の葉を伯母に持つ大和十市郡の狐であって、人間界に貸し与えた霊玉を取り戻すため真備家に嫁入ったことが明かされる。蘭菊の名も、古浄瑠璃『しのだ妻』で葛の葉が正体を頭わす、あの印象的な場面に因むもので

あろう。

本作の後半は、『蘆屋道満大内鑑』以前の歌舞伎の八信田妻物Ⅴの傾向に従っている。元禄十二年秋京早雲長太夫芝居上演の『しのだづま』は古浄瑠璃『しのだ妻』に即した筋の運びであったが、同年大坂嵐三右衛門座の『しのだづま後目』では、狐と契るのが保名ではなく清明であり、行力競べも清明の弟小四郎と敵役段之丞との間で行われるなど、一段ずらしてある。葛の葉とは伯母姪の関係にある蘭菊、という設定も、この傾向に従ったものと考えることができる。

以上にとりあげた黒本以下の諸作は、時代を王朝に採って、歌舞伎、浄瑠璃の王代物の雰囲気の色濃く残すものであったが、それとは一種趣きをかえた作品の一群を、また草双紙のうちに見出す。『阿部清兵衛見通占』(三冊 市場通笑作 鳥居清長画 天明二年刊)、『御両国信田染』(二冊 京伝門人山東鶏告作 北尾政演画 天明六年刊)、『安倍清兵衛一代八卦』(三冊 曲亭馬琴作 北尾重政画 寛政九年刊)などの黄表紙である。

『阿部清兵衛見通占』は、駿河安部川近在の茶商安部清右衛門の一子清兵衛を主人公とする。清右衛門は清兵衛に江戸商いを任せる。江戸に着いた清兵衛は、さる金持ちの楽隠居に茶飲み競べを挑んで茶に酔い、吉原に繰り出して茶屋遊びの味を覚え、粹狂を尽す。帰郷の遅延を案じた父親江戸へ出で、怒って勘当。清兵衛は占い師となって糊口をしのぎ、許される日を待つ、という物語。清兵衛を茶商の独り息子とする設定は、安倍↓駿河↓茶という連想によるものであろう。

『御両国信田染』の主人公は、江戸柳橋の貧乏占い師阿部安名。保名ならぬ安名は、同朋町の芸者「おさよ」を主家の娘と偽ってわが家に連れ込み、妻の葛の葉を追出す。葛の葉は向両国の仮宅に玉藻と名乗ってお職を張り、おりから出開帳で江戸出府中の、嵯峨清涼寺の釈迦如来と深く馴染んで、釈迦の腕にある梵字の入れ墨を嫉妬、消そうと

して据えた灸の香りにむせ、九尾の古狐の正体を現わし、石のとつくりと化す。回向院の住職が弘子で打ち砕くと、中から「恋しくばたづね来て見よ多かうあんついに此身はとつくりとなる」の歌が吹き出す、という物語。前年六月両国回向院における清涼寺三国伝来赤梅檀の釈迦如来像出開帳を当て込んだ作で、向両国の仮宅も前々年四月吉原の火事の時のものである。

『安倍清兵衛一代八卦』の主人公は、「おいしくはたつねくひみよいともなるとだなのすみのうらみくすもち」の一首を残して母親に去られた「あべのどう次」。故郷を夜逃げ同然に飛び出して江戸へ出て、与かん平の商いを手伝って過すうちに、夢枕に現われた母葛の葉から、口占の奥義を授かり、「あへの清兵衛」と改名して占いを開業、近所の若い衆が嫌がらせに持込んだ、封をした容器の中味を当てたり、しっくりしない夫婦の仲を直してやったりした末、さる歴々のお姫様のぶらぶら病いを見立て、扶持を得て安楽に暮す身分となる物語。前々年の江戸都座で評判を取った『蘆屋道満大内鑑』に想を得た作という。

いずれも当代の市中に保名あるいは清明を生活させ、『蘆屋道満大内鑑』の雰囲気から遠く隔たっている。まさに、黄表紙という都市の文芸が清明一代記を取込んだ図、である。しかし江戸という都市の強烈な特性の中に吞み込まれて、なお八信田妻物Ⅴの系譜に連なることの証しを残す。作中に、狐を、なんらかの形で登場させることがそれ。たとえば、八信田妻Ⅴ離れのもっとも著しい『阿部清兵衛見通占』で、吉原での馬鹿さわぎの一景として、狐釣りの余興を描くごとくに、である。

かくして信田の杜の狐の物語は、浄瑠璃や歌舞伎とうらはらの関係を保ちながらであったが、読み物のかたちを採っても、都市の住人の満足を得たのであった。

なお、ついでながら、読本における八信田妻物Ⅴの一例をここに紹介しておく。馬琴作『敵討裏見葛葉』（葛飾北

齋画 文化四年刊)である。その総目録をかかげてみる。

- 第一回 矢田部定邦楠本の神社を毀て宝珠を得たり 附タリ信太庄司晴俊が事
- 第二回 千枝丸はやく火宅を厭ふ 並石川悪右衛門人に憑たる狐を釣る事
- 第三回 安倍保名大和川に狐を助く 附タリ楠木千枝丸勉て人の過を補ふ事
- 第四回 少年玉を抱て玉と碎かる 並ニ庄司別を決して河内へ赴く事
- 第五回 信太庄司吒祇尼天の法を修す 附タリ石川悪右衛門祭殿を鬧す事
- 第六回 保名信太に恩人の首を贈る 並ニ葛葉途に夫を勦る事
- 第七回 四天王寺に保名兩個の妻を見る 附タリ妖婦和歌を詠じてその子に別る事
- 第八回 一条反橋に道満識神を走らす 並ニ童子統命の法を修する事
- 第九回 七歳の児瓜を割て道満を討んと請 附タリ兇賊首を授て童子絶たる家を興す事

摂州矢田部の領主定邦は安和二年の戦乱に軍功をたて信太の郷を得て、邪神なりとして楠本稻荷社を破却する。歸路草庵に憩つて美童千枝丸を得て寵愛。石川悪右衛門行力によって定邦の愛妾に憑いた楠本社に狐を捕えて大和川に流す。楠本社に得た宝珠紛失し、罪をかぶつて千枝丸自害。矢田部定邦は信太庄司を招き、吒祇尼天の法を修しての探索を依頼、悪右衛門発覚を恐れて庄司を殺し、蘆屋に逃れて道満と名を改める。安倍保名は摂津阿部野の売卜者、仲鷹の後胤で、父保明は陰陽博士賀茂家の門人であったが、六条の遊君に馴染んで破門され、窮状を同門の庄司に助けられた。庄司の娘葛の葉を妻に得た保名にとって、悪右衛門は憎みても余りある仇敵、加えて千枝丸こそ故あつて

捨て子された弟であった。かくして複雑にえにし糸のからまった敵討の物語が展開される。

他の馬琴作読本同様、版を重ねて読者の歓迎をうけた。初版は平林庄五郎の刊行であったが、中村屋幸蔵その他の手に渡って刷り続けられたことなど、鈴木重三氏「馬琴読本諸版書誌ノート」に詳しい。⁽⁸⁾ また仮名垣魯文作の中本型読本『復讐信太森』（安政七年刊）は本作の抄録、という。⁽⁹⁾ 明治に入ってもこの風潮は変えることはなかった。活版本に装いを改めて、新しい読者を増やす。いま『国立国会図書館所蔵明治初期出版物目録』を検索するに、鶴声社金桜堂版（明治17）、日吉堂版（明治22）、駸々堂版（明治23）等三種を見出だす。

かくして、狐の子安倍の童子の一代記は、人々の喝采を得た。古浄瑠璃『しのだ妻』、浄瑠璃『蘆屋道満大内鑑』に劇化され、さらに歌舞伎に取り入れられて人気を博したのであったが、決してそれだけでなかったと言えるであろう。早く仮名草子『安倍清明物語』に、そして浮世草子『安倍清明白狐玉』に小説化され、さらに草双紙、読本にとりあげられ、数多くの作品を生んだ。また、仏教勧化の夜講の種としても利用されて、『安部仲麿入唐記』『泉州信田白狐伝』のごとき本になり、それがまた戯作や歌舞伎の素材となって人々に親しまれたのであった。

暦数書の注釈から落ちた一粒の種が芽をふき、根をはり、枝分れをして、豊かな稔りをもたらしたのであったが、その過程にあって、『安倍清明物語』こそその功績を讃えらるべきであろう。後続作を輩出させた古浄瑠璃『しのだ妻』も『安部仲麿入唐記』『泉州信田白狐伝』も、この作品に依った作であった。『安倍清明物語』は、確証のないままにはあるが、浅井了意の作とされる。彼は仮名草子時代随一の多作家であり、人気作家であった。この人にしてこの作ありと、あるいは了意作者説は首肯さるべきなのかもしれない。

以上、本稿は、文芸作品の中に創造された人物が、いかなる変遷をたどるかを追ってみた、登場人物考とも呼ぶべき試みである。

注

- (1) 前号所載の拙稿「『簾篋抄』以前——狐の子安倍の童子の物語——」を参照せられたい。なお、前稿同様に登場人物名を、典拠に即して、それぞれ「清(晴)明」「中丸(仲暦)」のごとく変えた。
- (2) 村山修一氏『日本陰陽道史概説』(昭五六 塙書房) 一〇八ページ。
- (3) 浮橋康彦氏「蘆屋道満大内鑑」(森山重雄氏編『近世演劇の思想と伝統』昭四一 新説書社、所収)。
- (4) 横山邦治氏『読本の研究』(昭和四九 風間書房) 六二八～六三三ページ。
- (5) 宝暦七年の刊本に同十年の序の付くことが不思議であるが、その理由は分からない。
- (6) 関山和夫氏「仏教小説『連夜説教』の実態」(『同朋大学論叢』44・45合併号、昭56・6)「仏教小説『連夜説教』の話芸性」(『話芸研究』1 昭和56・9)
- (7) 長谷川強氏『浮世草子の研究』(昭四四 桜楓社) 四一九ページ。
- (8) 鈴木重三氏『絵本と浮世絵』(昭五四 美術出版社)
- (9) 高木 元氏「末期の中本型読本——所謂『切付本』について——」(『近世文芸』45 昭61・11)

〔追記〕

本稿成稿後、山下琢巳氏「近世中期勸化本と草双紙——その影響関係について——」(『日本語と日本文学』九、昭63・9)の発表があった。